

## 「春別」と「春の別れ」

### —伊勢物語第七十七段の問題点—

—

伊勢物語の第七十七段は、「田村のみかど」すなわち文徳天皇の女御であつた「多賀幾子」が逝去し、安祥寺で「みわざ」がおこなわれた際のできごとを、次のように語っている。(宮内庁書陵部蔵冷泉為和筆の天福本により、表記の一部を改めた。以下同じ。)

昔、田村のみかどと申すみかどおはしましけり。その時の女御、多賀幾子と申すみまそかりけり。それうせたまひて、安祥寺にてみわざしけり。人々ささげ物奉りけり。奉り集めたるもの、千ささげばかりあり。そこばくのささげ物を木の枝に付けて、堂の前に立てたれば、山もさらに堂の前に動き出でたるやうになむ見えける。それを、右大将

## 山本 登朗

にいまそかりける藤原の常行と申すいまそかりて、講の終はるほどに、歌よむ人々を召し集めて、今日のみわざを題にて、春の心ばへある歌奉らせたまふ。右の馬の頭なりける翁、目はたがひながら、よみける、

山のみな移りて今日にあふことは春の別れをとふとなるべし

とよみたりけるを、いま見ればよくもあらざりけり。そのかみはこれやまさりけむ、あはれがりけり。

すなわち、右大将であつた藤原常行が、「講の終はるほど」に「歌よむ人々」を呼び集め、「今日のみわざ」を題として「春の心ばへある歌」を献上させたが、その中で、主人公すなわち「右の馬の頭なりける翁」の歌が、もっとも賞賛されたといつのである。章段の前半には、多くの人々が奉ったささげ物が木の枝

に付けて立てられ、その情景がまるで山が動き出したように見えたという記述も記されているが、それは、「山のみな移りて今日にあふことは」という主人公の歌の表現の意味するところを読者に知らせるために、あらかじめ記された描写であった。

この、主人公が詠んだ歌の中の「春の別れ」という言葉の意味をめぐって、古くからいくつかの説が提示されているが、いまだ完全には決着を見ていない。以下、その諸説をあらためて検討しながら、この章段の理解を試みてみたい。

## 二

いわゆる冷泉家流の伊勢物語古注は、この「春の別れ」を、  
 …彼ノ女御、春宮ノ女御ニテ座シカバ、春ノ別レヲ問フト云フ也。

〔『伊勢物語古注釈大成』第一巻（平成一六年・笠間書院）所収の鉄心齋文庫蔵『十巻本伊勢物語注』による。なお、以下、引用にあたっては原本の表記を一部改めている。〕

と説明するが、この注記の内容は歴史的事実とは異なっており、古注独特の特異な物語解釈の一部と考えられる。ここでは

この種の説をこれ以上問題にしない。

一方、同じ古注でも『和歌知頭集』（鳥原松平文庫本系）は、次のように、この一首の表現を、釈迦の涅槃をふまえたものとして解している。（書陵部本系の『和歌知頭集』には、この部分の注記が記載されていない。）

…これは、さ、げ物を多く集めたりけるが、堂の前に山の出で来るやうに見ゆるを、まことの山にとりなして詠めり。その故は、二月十五日に、昔、釈迦如来の涅槃に入り給ひし時、その別れを悲しみて、大地震動して、山動きけるなり。しかるに、また今日、この女御の御孝養あり、山の動きて出で来たるやうに見ゆるは、この女御の御別れ惜しみ奉りてぞ、山は動き出で来たるらんと思ひて詠めるなり。

〔『伊勢物語古注釈大成』第二巻（平成一七年・笠間書院）所収の鉄心齋文庫蔵本により、一部他本によって本文を改めた。〕

ここには「春の別れ」という表現についての説明は特に見られないが、同種の理解は、室町時代後期における二条流歌学の継承者であった堯恵（明応七年・一四九八以降没）の高弟・鳥居小路経厚（天文十三年・一五四四没）の説を伝える『経厚講

伊勢物語聞書』にも、次のように、「春の別れ」という部分に對する注記の形を取つて記されている。

：歌ノ心、「春の別れ」トハ、双林入滅ノ時、四枯四榮ノ相ヲ頭ハスヲ始メテ、殘ル物ナク愁ヒ悲シミシ面影ヲウツシテ、山モ此場ニ移リ來テ、永ノ一別ヲ問フニヤト云フ心也。ソレヲ又、女御ノ追善ニ取り合ハセテ、捧ゲ物ノ山ノ如クナルモ、今日ノ追善ヲ供敬スル歎ト云フナルベシ。

（『京都大学国語国文資料叢書』〈昭和五三年・臨川書店〉の曼殊院本影印による。）

さらに、この理解が師の堯惠の説でもあつたことが、鉄心齋文庫藏『堯惠加注承久三年本校合伊勢物語』（山本『伊勢物語論 文体・主題・享受』（平成一三年・笠間書院）第三章六参照）の、次のような書き入れ注によつて確認される。

捧ゲ物ヲ山トサス。仏事ニ山モ來テ會フ歎ト也。仏ノ別レヲ思フ時ノ様ナルベシ。表ハ、二月釈迦入滅ノ時、五十二類、種々ノ物ヲ捧ゲタルガ如ク也。裏ハ、女御ノ事、山モ來テ問ヒ弔フ歎ト云フ心。

主人公の一首の表現を釈迦の涅槃をふまえたものと見る理解は、このように、室町時代にも由緒正しい説として行われていたことが知られるが、これとほぼ同様の注記が、契沖の『勢語

臆断』にもまた、次のように記されている。

：「春の別れ」とは、折節春なれば今日の法事を仏の涅槃になずらへて言へる歎。『涅槃経』ニ云ハク「爾ノ時ニ世尊娑羅林ノ下ニシテ寢臥スニ宝牀ニ。於ニ其ノ中一夜ニ入ニ第四禪ニ、寂然トシテ無レ声。於レ是時頃便ハチ般涅槃シタマフ。入りニ涅槃ニ已其ノ娑羅林東西ノ二双合シテ為リニ一樹ト、南北ノ二双合シテ為ルニ一樹ト。垂レニ覆ヒ宝牀ニ蓋ニ覆ス如来ヲ」。又「大山崩裂ス」ともあれば、山も移り木も移りたるやうに見ゆるは、これらの心にや。又云ふ「世尊已ニ入リタマフニ般涅槃ニ。四天王与ニ諸ノ天衆ニ悲哀流涙シテ各弁ジテニ無数ノ香花ヲ一投テニ如来ノ前ニ一悲哀供養ス。五天モ如ク是ノ倍ニ勝於前ニ。色界無色界ノ諸天亦如クシテニ是ノ一倍ニ勝於前ニ」。おほく供養の物のあるは、これらの心地もすべし。

さすがに契沖らしく『涅槃経』の本文を丁寧に引用して「これらの心地もすべし」と述べているが、基本的な理解の方向は、『和歌知頭集』や堯惠流の説と大差はない。この種の解釈は、これ以後、賀茂真淵の『伊勢物語古意』や藤井高尚の『伊勢物語新釈』をはじめ数多くの注釈に受け継がれ、現在に至つてい

しかしながら、その一方で、冷泉家流などの古注を否定し、新しい伊勢物語注釈の時代を切り開いた一条兼良（文明十三年・一四八一没）の『伊勢物語愚見抄』は、一首の表現を釈迦の涅槃をふまえたものと見る上述のような解釈を採用せず、「春の別れ」という表現についてただ次のように注している。

「春の別れ」は、女御、中陰の果てて三月の末にあへるにや。（中略）：又、「春の別れ」と歌によめれば、女御の中陰のはつる事、三月の末にあたりて、講筵をのべ侍るにや。

（京都大学国語国文学研究室蔵大永二年書写本による。傍点筆者。以下同じ。）

多賀幾子を実際には天安二年の十一月十四日に没しており、四十九日の法事だとしても三月末にはならないこと、天安二年には常行はまだ右大将になっておらず、業平も右馬頭になっていなかったことなどを中略部に記しながら、その前後に繰り返して記されているのは、この法事が三月末に行われたのではなく、かたかたという記述である。おそらくはあまりにも当然のこととして、はっきりと述べられていないが、兼良は「春の別れ」という表現を、春という季節との別れ、すなわち「三月尽」を

意味する言葉として理解しているのである。

同様の理解は、細川幽斎の『伊勢物語闕疑抄』をきびしく批判しながら自説を展開した荷田春満（元文元年・一七三六没）の『伊勢物語童子問』にも、次のように見られる。ここでもまた、「春の別れ」が春との別れの意味であることは、自明の理のように前提とされたうえで、次のような注記が記されている。

：且つ、普通の本のみを見ては、此の「春の別れを問ふとなるべし」と言ふて、いかが聞こゆべきや。かのたかきこの女御のうせ給へるは、天安二年十一月十四日と国史に見えたるを、「春の別れを問ふとなるべし」は、いかがみて解有りや。真名を見てこそ此の歌も聞こえたり。真名本「昔、田邑帝与申御門御在計利。其時之女御多賀幾子与申、在計利。其疾給而、後御行安祥寺爾而沽洗之晦爾為計利」とあり。是にて詞も歌も「春の別」も聞こえたり。普通の本の詞にて「春別」聞こえず。：

（片桐洋一編『伊勢物語古注釈コレクション』第四卷〈平成一五年・和泉書院〉による。）

真名本伊勢物語の第七十七段には「其疾給而後御行安祥寺爾而沽洗之晦爾為計利（それうせたまひて、後のみわざ安祥寺にてや、よひのつごもり、しけり）」という本文が見えるが、春満

は、伊勢物語を歴史的事実とは異なつた虚構と見る姿勢と、「普通の本」すなわち定家本よりも真名本を重視する立場から、第七七段で設定されている法事の時期を、記録に残る十一月十四日から数えて四十九日目と考える通説を否定し、「沽洗之晦」すなわち三月の月末（「沽洗」は三月の異名）と考えるべきであるとし、そのうえで、「春の別れ」という表現を、春という季節との別れ、すなわち「三月尽」を意味する言葉として、あらためて位置づけている。

『伊勢物語童子問』の真名本重視の姿勢を継承した賀茂真淵の『伊勢物語古意』や藤井高尚の『伊勢物語新釈』は、さき述べてのように契沖の涅槃説をも肯定しているが、同時にまた、真名本による「やよひのつごもり」に「…」という本文を採用して、次のように、この三月尽説にも賛意を示している。

此の女御の御わかれと、春三月の別れとをかねて、且つ如  
来入滅には海水飛湧大山崩裂など云ふを思ひよせて、山々  
もみな此の御庭にうつり来れるは、此別れをとむらふなり  
けりと詠める也。（『伊勢物語古意』寛政五年版本による。）

此の歌は、臆断に（中略）…とやうに解けるぞよろしかり  
ける。「春の別れ」とは、をりしもやよひのつごもりなれ  
ば、女御の御わかれを「春の別れ」といひなしたる也。（『伊

勢物語新釈』文政元年版本による。）

現代の注でも、たとえば講談社文庫『伊勢物語』（森野宗明校注・昭和四七年）が定家本の本文を掲げながら「はるのわかれ」  
「三月尽とみる説がしぜんだろう」と注しているように、類似  
の理解を示している注釈は少なくない。

#### 四

ところが、一条兼良の学を批判的に受容しながら二条流歌学の継承をも標榜して、室町時代後期古典学の主流の位置を占めるに至つた連歌師宗祇の説を伝える『伊勢物語肖聞抄』には、次のように、「春の別れ」という表現の背後に釈迦の涅槃を見るという注記も見えず、またこの表現を三月尽の意味に理解するという注記も見ることができない。

数々の捧物の山のごとくなるを、則ちまことの山も今日の  
別れを悲しぶやといふ心也。歌さま優には見えねど、こひ  
て其の故ありと見ゆる体也。

（宮内庁書陵部蔵伝肖聞抄本による。）

このように、あまりにも簡略な『肖聞抄』の注記からは、「春の別れ」という表現に対する宗祇の理解を読みとることは容易

ではないが、同じ宗祇の説を伝える『伊勢物語宗長聞書』には、次のような注記が記されている。

「春の別れをとふ」とは、春なればよそへていへり。「別れ」とは此女御の別れ也。

(京都大学国語国文学研究室蔵本による。)

すなわちこれによれば、宗祇は、「春の別れ」という表現を、ただ、春という季節における人(多賀幾子)との別れという意味に理解していたと考えられる。宗祇流歌学の継承者たちの説を伝える『惟清抄』『伊勢物語闕疑抄』など数多くの注釈にも、「春の別れ」という表現を釈迦の涅槃をふまえたものと見る見解はまったく示されておらず、また、それを三月尽の意に解する注記も記されていない。これらの諸注釈では、「春の別れ」という表現は、ただ、春という季節における人(多賀幾子)との別れという意味に理解されていたと考えられるのである。

この種の解釈は、室町時代後期から江戸時代にかけて、いわゆる「古今伝授」とともに継承され、数多くの旧注諸注釈に受け継がれていった。そして、現代の注釈にも、たとえば新編日本古典文学全集『伊勢物語』(福井貞助教注・平成六年・小学館)に「春の別れ」は、春における死別をいう」と注されているように、ほぼ同様の解釈をしばしば見ることができる。

以上、第七十七段の歌の「春の別れ」という言葉についての三種類の解釈を、注釈史をたどりながら概観してきたが、その三種類の解釈を簡略にまとめて示せば、次のようになる。

A 「春の別れ」という表現の背後に、二月十五日と伝えられる釈迦の涅槃を見ようとする解釈。

B 「春の別れ」という表現を、春という季節との別れ、すなわち「三月尽」の意味に理解しようとする解釈。

C 「春の別れ」という表現を、ただ、春における人との別れという意味にとらうとする解釈。

ただし、第七十七段の主人公の一首は、あくまでも「今日のみわざ」すなわち女御多賀幾子の没後の法事を「題」として詠まれたものであった。すなわち、AやBのような解釈が示されている場合でも、そこには、必ずCのような意味が、一首本来の主題として、重ねて読みとられているはずである。また、賀茂真淵の『伊勢物語古意』や藤井高尚の『伊勢物語新釈』では、AとBの二つの解釈が共に重ねて用いられていた。ということからは、それらの注釈では、上記の三種類の理解がすべて重ねて行われているということになる。このように、三種類の理解をすべて重ねて示すという読解の姿勢は、現代の注釈にもしばしば見られるところである。

ここで問題にしている「春の別れ」という言葉は、その語形から見て、「春別」という漢語を翻読したものと考えられる。その「春別」の語の例としては、まず梁の蕭子顯「春別四首」(『玉台新詠』卷九)をあげることができる。いま、その四首中の第一四首を、次に掲げておく。

銜悲攪涕別心知 悲しみを銜み涕を攪る 別心知る

桃花李花任風吹 桃花李花 風の吹くに任す

本知人心不似樹 本知る 人心は樹に似ざるを

何意人別似花離 何ぞ意はん 人の別るるは花の離るる

に似んとは

夫ないしは恋人との別離を風に散る花になぞらえた一首だが、この作からもわかるように、「春別」とは、春という季節の中で、夫や恋人と別れる、ないしは別れ別れになっている、という意味であって、内容的には「春閨怨」に近い。『玉台新詠』卷九には、この他に、この蕭子顯の作に和した皇太子簡文(梁の簡文帝)の「和蕭侍中子顯春別四首」や、さらにそれに和した湘東王繹(梁の元帝)の「春別応令四首」が収められているが、その内容はさきに見た蕭子顯のものと同く似ている。

また、晋代の樂府「子夜四時歌七十五首・夏歌二十首」には、次のような作が見える。

春別猶春恋 春に別れて 猶春に恋ひ

夏還情更久 夏には還た 情更に久し

羅帳為誰褰 羅帳 誰が為にか褰げむ

双枕何時有 双枕 何時にか有らん

ここでもまた、「春別」の語は、春における恋人との別離をいう語として用いられている。同種の例は他にも多いが、次にも一例、日本文学にかかわりの深い白居易の詩から、「独酌憶微之(独酌して微之を憶ふ)」と題された絶句の例をあげておく。

独酌花前醉憶君 独り花前に酌み 酔うて君を憶ふ

与君春别又逢春 君と春別れて 又春に逢ふ

惆悵銀杯來処重 惆悵す 銀杯の來処ること重く

不曾盛酒勸聞人 曾て酒を盛りて聞人に勸ざること

ここで白居易は、また春がやって来たのに、昨年の春に遠方に旅立った親友の元稹(微之)がまだ戻らずにいることを嘆いている。もはや「閨怨」とは言えない内容だが、「春別」の語が、春における人との別れを意味することは、ここでも変わらぬ。白居易や唐代の詩人たちの他の用例についても、事情は同じである。

このように、「春の別れ」という表現のもとになったと考えられる漢語「春別」は、春という季節における人との別れを意味する語としてのみ用いられており、釈迦の涅槃は言うまでもなく、春との別れ、すなわち「三月尽」の意味で用いられている例も、見出すことができない。大江維時によつて天曆前後、すなわち十世紀なかばに編集されたと考えられる佳句集『千載佳句』には「饑別」「宴別」「秋別」「留別」などと並んで「春別」と題された項目が設けられており、五つの句がそこに部類されているが、それらもすべて、春に人を送別したり別れを惜しんだりする内容のものであつて、「三月尽」の意味は見られない。(なお、平安時代の日本人が用いた「春別」の語の用例を、いま見出し得ていない。)

ところが、その「春別」の翻説語のように思われる和語「春の別れ」については、事情は大きく異なっている。以下に見るように、和歌に見られる「春の別れ」の用例はすべて、春との別れ、すなわち「三月尽」の意味を含み持つて用いられているのである。(歌番号は『新編国歌大観』による。)

① a 待てといふにとまらぬものと知りながらしひて恋しき  
春の別れか

(新撰万葉集269・下巻・春)  
b 暮れはてて春の別れの近ければいくらのほどもゆかじ

とぞ思ふ

(伊勢集116)

c 春ゆかば花とともにをしたひなむ遅れば何のみにかなるべき  
(忠見集109・春の別れを惜しむ)

以上の①の例のうち、最後のcは歌題の用例だが、それをも含めて、「春の別れ」という語はすべて、春という季節との別れという意味で用いられている。

② a いつかまた会うべき君にたぐへてぞ 春の別れも惜しまるるかな  
(宇津保物語・吹上の上)

b 時の間に千たび会ふべき人よりは春の別れをまづは惜しまむ  
(同)

c 年ごとの春の別れをあはれとも人におくる人ぞ知りける  
(元真集191・ものへ行く人に小袷縫はでやる)

②としてあげたのは、春という季節との別れに、さらに、人との別れがかかわっている事例である。a bの二首は、『宇津保物語』吹上の上の巻の歌。紀の国の吹上に源涼を訪ねた仲忠たち一行は、都への帰途につく前日の「三月つごもり」に宴を開き、「春を惜しむ」という題で歌を詠みあう。その場では惜春の情と離別の情が交錯し、両者をさまざまに組み合わせた歌が詠まれているが、その中で「春の別れ」という表現が用いられているのがa bの二首である。cもまた、惜春の情と離別



の情がからみあつた歌。『和漢朗詠集』などにも入れられた、よく知られた一首である。

これらの歌では、一見、「春の別れ」という言葉に、惜春の情と離別の情の両方が重なつて表現されているように見えるが、実はそうではない。歌の表現をよく読めばわかるように、これらの場合も、「春の別れ」という言葉そのものは、あくまでも、春という季節との別れという意味だけを述べている。人との別れを悲しむ離別の情は、「春の別れ」という言葉のいわば外側で、惜春の情からみあわせて表現されているのである。

以上に見たように、和語「春の別れ」は、漢語「春別」とは異なり、春という季節との別れという意味でのみ用いられていた。これまでに検索し得た「春の別れ」の語例中には、釈迦の涅槃という意味を含んだ例も、人との別れの意味を含んだ例も、ともに一例も見出すことができないのである。

## 六

「春の別れ」の語例の以上のような状況を考えれば、前にもAとして示した、「春の別れ」という表現の背後に釈迦の涅槃を見ようとする解釈は、当時の表現としてあり得ないものであつた

と言わざるを得ない。

そもそも、この解釈は、島原松平文庫本系『和歌知頭集』（鉄心斎文庫本）の中では、「これは、さ、げ物を多く集めたりけるが、堂の前に山の出で来るやうに見ゆるを、まことの山にとりなして詠めり。その故は、…」という記述に続いて提示されていた。すなわち、この解釈は、「山のみな移りて今日にあふことは」という主人公の和歌の上の句の表現と、それに呼応している散文部の、「そこばくのささげ物を木の枝に付けて堂の前に立てたれば、山もさらに堂の前に動き出でたるやうになむ見えける」という特異な描写を理由づけるために、ことさらに持ち出されたものであつたと考えられる。その事情が、堯恵や経厚、あるいは契沖の注釈でもまったく同じであつたことは、前に引いたそれぞれの注釈の注記を見れば明白である。

しかしながら、実際の經典の涅槃の場面ですべられているのは、「爾時大地諸山大海皆悉震動（爾の時に大地、諸山、大海、皆悉く震動す）」（『大般涅槃經』序品）といった、山が悲しみのあまり揺れ動くという内容であり、伊勢物語第七十七段のように、山が移動して法事の場に出て来るといった表現は、そこには見られない。

そして、そもそも、山が震動したり移動したりするというだ

けなら、釈迦の涅槃とは無関係な一般の漢詩文にも、次のように、「山動」や「山移」という言葉が、ごく一般的な表現として用いられてもいるのである。

I 四辺伐鼓雪海湧 四辺の伐鼓に 雪海湧く  
三軍大呼陰山動 三軍の大呼に 陰山動く

(盛唐・岑参「輪台歌奉送封大夫 師西征」(輪台歌、封大夫の出師西征するを奉送す))

II 汲水疑山動 水を汲めば 山動くかと疑ふ

揚帆覺岸行 帆を揚ぐれば 岸行くかと覺ゆ

(晚唐・曹松「秋日送方干游上元」(秋日、方干が上元に遊ぶを送る))

III 雖則事畢功成、然恐山移海變。

則ち事畢り功成ると雖ども、然るに恐るるは、山移り海變はること。

(初唐・趙顛「浮函銘」)

IV 海竭山移歲月深 海竭き山移りて 歲月深し

分明齊得世人心 分明齊しく得たり 世人の心

(晚唐・劉威「感寓」)

I IIは「山動」(山が震動する)の例。IIは舟で水上を進む場面。水を汲むとその波紋で、水に映った影が動き、まるで山が

震動するかのようだと言うのであろう。III IVは「山移」(山が移動する)の例。長い年月の間には地形や風景も一変するということを使う時、たとえば碑文などにこの「山移」の語が多用される。第七十七段の主人公の歌の「山のみな移りて」という表現は、この漢語「山移」を翻譯したものと考えられる。

## 七

さきに見た語例の様相を見るかぎり、第七十七段の主人公の歌の「春の別れ」という語もまた、春という季節との別れという意味だけを述べているものと、ひとまずは考えられる。山々がこの場に移動して来ているのは、今日で過ぎ去ってしまう春という季節との別れを惜しむためなのだ、一首は述べているはずなのである。

こう考えて問題になるのは、ここで述べられている「みわざ」すなわち法事の日付である。一条兼良の『伊勢物語愚見抄』が指摘したように、藤原多賀幾子が没したのは天安二年十一月十四日であったことが『三代実録』によって知られるが、「それうせたまひて安祥寺にてみわざしけり」と語られているその「みわざ」は、葬儀であれば言うまでもなく、また四十九日の法事

であつても、三月の末にはならない。兼良が歴史的事実との不一致をいぶかしがりながら疑問文の形で提示した「三月尽」説が、宗祇とその門流たちに継承されなかつたのは、同じ兼良によつて指摘された、多賀幾子の没した実際の日付との矛盾が、暗黙の内に重視されたためであつたとも考えられる。

その点で注目されるのが、荷田春満の『伊勢物語童子問』である。春満はこの注釈書で、『伊勢物語闕疑抄』などの旧注を、伊勢物語の背後に事実を見ようとしていきびしく批判し、伊勢物語があくまでも虚構の世界を描いたものであることを強調しているのだが、特にこの段では、真名本伊勢物語の「後のみわざ安祥寺にてやよひのつごもりにしけり」という本文を重要視し、それによつて「三月尽」説をごく自然に主張している。

『三代実録』に記された日付との不一致を承知のうえで「三月尽」説に従つてこの歌を読みとろうとする場合、伊勢物語第七十七段の内容は、『童子問』が主張するように、事実とは異なつた虚構であるということになる。第七十七段の世界では、多賀幾子の葬儀、または四十九日の法事は、あくまでも三月の月末におこなわれているはずなのである。このように、章段の設定を虚構と考えれば、日付の問題は解決するようにも見える。

が、実は必ずしもそうではない。

春という季節が去つてゆくのを惜しむ、いわゆる「三月尽」の心情は、よく知られているように白居易が繰り返し詩作の主題としたものであり（平岡武夫『白居易―生涯と歳時記』平成一〇年・朋友書店）、平安時代の文学にも大きな影響を及ぼしているが、伊勢物語もけつして例外ではなかつた。たとえば、次あげる第八十段は、その「三月尽」を主題とする、もつとも典型的な章段のひとつである。

昔、衰えたる家に藤の花植ゑたる人ありけり。三月のつごもりに、その日、雨そほ降るに、人のもとへ折りてたてまつらすとて詠める、

ぬれつつぞしひて折りつる年の内に春はいくかもあらじと思へば

平安時代の人々の白居易に対する敬愛と崇拜は、「三月尽」を、風雅を好む教養人がかならず共有しなければならない心情へと高めていった。それを知らなければ、この段の内容を十分に理解することはできない。第八十段では、「三月のつごもりに」という説明が短い本文の中にわざわざ記されていて、その事情を読者に知らせていた。同じ「三月尽」の主題は、第八十三段・第九十一段にも見ることができ、それらの章段にも、

「時は三月のつごもりなりけり」(第八十三段)、「三月つごもりがたに」(第九十一段)という記述がことさらに記されている。ところが、いま問題にしている第七十七段には、定家本を初めとする大多数の本によるかぎり、その日が三月の末であることを示すその種の記述がまったく見られないのである。第七十七段の主人公の歌の「春の別れ」という言葉に対する解釈が、古来さまざまに揺れ動かざるを得なかつた最大の原因は、実はそこにあつたといわねばならない。

この点で注目されるのが、『伊勢物語童子問』が重視した真名本の「後御行安祥寺爾而沽洗之晦爾為計利(後のみわざ安祥寺にてやよひのつごもりにしけり)」という本文である。この本文は、塗籠本や広本系(大島本系)諸本とも一致しない、いわば少数派の本文だが、静嘉堂文庫本伊勢物語絵巻(断簡)の第七十七段の本文は、この部分が「御はてあんしやうじにてやよひのつごもりにしけり」と、真名本に近い形になっていて注目される。同絵巻は、室町時代後期から江戸時代にかけての多くの作例が残る大英図書館本系(小野家本系)伊勢物語絵巻の一点だが、この系統の伊勢物語絵巻には絵と本文の不適合が指摘される部分があつて、古くは本文が現状とは異なつた非定家本だつたのではないかと推測されている(『伊勢物語絵巻絵本

大成』〔平成十九年刊行予定・角川書店〕研究編を参照)。静嘉堂文庫本がもしその古い非定家本の本文を伝えているとすれば、この系統の絵巻の祖本があつた可能性が大いことになる。祖本と近い関係にあつた可能性が大いことになる。

このように、真名本の本文は、かならずしも孤立したものではなく、おそらくは室町時代に、類似の本文をもとにした絵巻が作られるほど一般的な本文であつた可能性を有しているが、それを考えに入れてもなお、少数派の本文であることに変わりはない。「春の別れ」という、あきらかに「三月尽」を思わせる表現の和歌を有するこの段の本文から、もつとあつた「やよひのつごもりに」という部分をわざわざ削除することは考えがたいことであり、だとすれば、逆に、真名本等の本文の方が後に改められたものである可能性も否定できなくなってくる。この問題については、なお後考を待つことにしたい。

八

第七十七段の主人公の和歌には、さらにもうひとつ問題点が残されている。さきにも述べたように、この歌はあくまでも「今日のみわざ」すなわち女御多賀幾子の没後の法事を「題」

として詠まれた作であった。そのように、季節との別れだけでなく、そこに人との別れを取り合わせて嘆いている点で、この歌が詠まれた情況は、前に見た『宇津保物語』(吹上の上)や『元真集』の場合によく似ている。しかしながら、たとえばその『元真集』の一首が、

年ごとの春の別れをあはれとも人におくる人ぞ知りけると、「人におくる」という表現で人との別れを明示していたのに対し、この主人公の一首には、それにあたる表現が見られない。

このままの表現では、この一首は、ただ三月尽という「春の心ばへ」だけを詠んだ歌として受け取られかねないが、それは「今日のみわざ」という題にそぐわないばかりか、なくなった女御多賀幾子に対しても礼を失したことになる。宗祇とその門流の人々が、頑固なまでに三月尽説を受け入れなかったもうひとつの理由は、あるいはそこにあつたとも考えられる。

すでに見たように、漢語「春別」とは違って、和語「春の別れ」は、見出し得るすべての例で三月尽の意味に用いられており、春における人との別れという意味に用いられた例は確認できなかった。だが、この段の主人公の一首を「今日のみわざを

題にて、春の心ばへある歌」として理解するためには、用例からの帰納的判断を超えて、この歌の「春の別れ」という表現に、三月尽と、春における女御多賀幾子との別れという意味が、掛詞のように重ねられていると考えることが、どうしても必要である。

かくしてこの一首は、和語「春の別れ」を漢語「春別」と同じ意味に用い、さらにそこに三月尽の意味をも重ね合わせた、特異な表現を用いた一首であつたということになる。この第十七段の末尾には、

とよみたりけるを、いま見ればよくもあらざりけり。そのかみはこれやまさりけむ、あはれがりけり。

という、虚構の語り手からの批評が付されているが、「そのかみ」の高い評価へのいぶかしさを込めた「いま見ればよくもあらざりけり」という評言には、和語「春の別れ」を漢語「春別」と同じ意味に用いたことに対する不審の念が一部に込められていたとも考えられる。もとよりこの批評の眼目は、主人公である「翁」が、木の枝に付けて立てられた多くの「さざげ物」を、「目はたがひながら」すなわち老眼のために見誤り、「山」が「移」つたと誤解したとして批判する点にあると考えられるが、漢語「山移」の翻読語と思われるこの「山：移る」という

表現もまた、当時の和歌の中に他に用例を見ない、和語として  
きわめて異例な表現だったのである。

(やまもと とくろう／本学教授)